

国際社会学部—インド（南アジア地域）

世界最多の人口地域へ

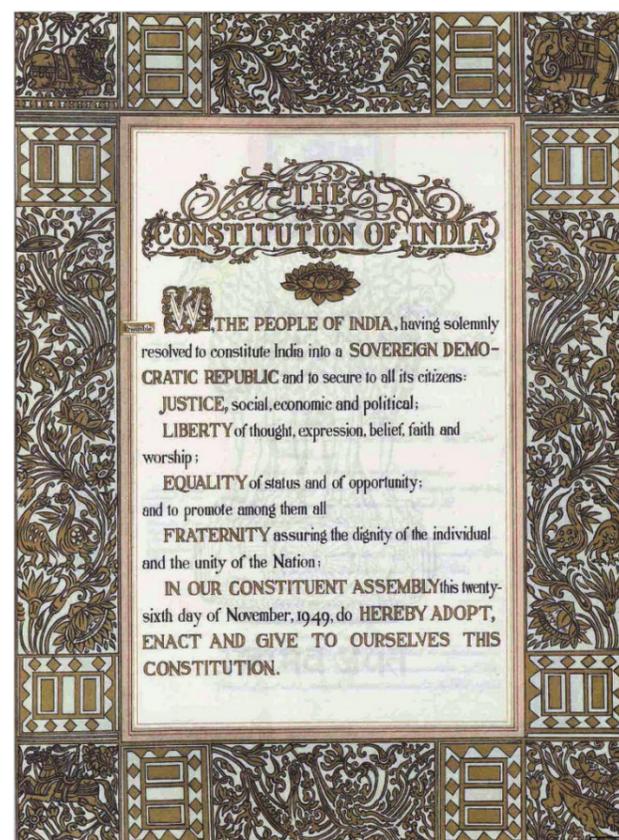
「南アジア」という地理概念は時代によって様々な定義がなされますが、南アジア地域協力連合(SAARC)を 1 つの基準とすると、インド、バングラデシュ、パキスタンなど 8 つの国家で構成された地域ということになります。南アジアは世界の中でも有数の人口を抱える地域であり、人類の約 4 分の 1 がこの地域に暮らしています。地域を構成する国家間には歴史的に深い繋がりがあり、国境を超えて数多くの言語・文化が共存してきました。

「南アジア」の中で最大の面積と人口を擁するのが「インド」です。面積では世界第 7 位、人口は 2023 年に中国を抜いて世界最大になると言われており、経済発展の面でも着目されています。2022 年の IMF のデータによると名目 GDP は旧宗主国であるイギリスを抜いて世界第 5 位となっています。

インドは多言語・多文化・多宗教社会を構成しています。インドは憲法第 1 条において「インド即ちバーラトは連邦国家とする India, that is Bharat, shall be a Union of States.」と定めています。現在、連邦は 28 の州と 8 つの連邦直轄地で構成されています。特に 1950 年代からインドは言語別州際編成を行ったため、多くの州が言語を単位として構成されています。そのため人々のアイデンティティは、インド全体への帰属意識と各地域への帰属意識の双方により重層的に構成されています。

またインドは諸宗教の地でもあります。ヒンドゥー教、仏教、シク教、ジャイナ教といったインド発祥の宗教に加え、イスラーム教、キリスト教、ゾロアスター教を信仰する人々が共存する地です。独立インドは世俗主義の立場を取り、宗教間の調和を図ってきました。

インド社会のすぐれた多様性の一方で、インドには様々な社会的課題が存在しています。14 億人という巨大な人口を抱えるインドは「世界最大の民主主義国」を自称しています。植民地主義の影響を残しつつも、インドが自らの足で歩んできた道程を辿りつつ、また最新の南アジア研究の成果を取り入れながら、この刺激的な地域について、皆さんと一緒に学びたいと思います。





南アジア地域協力連合(SAARC)は、南アジア諸国民の福祉の増進、経済社会開発及び文化面での協力、協調等の促進等を目的とした比較的緩やかな地域協力の枠組みです。

現在の加盟国は、8か国(インド、パキスタン、バングラデシュ、アフガニスタン、ネパール、スリランカ、ブータン、モルディブ)となっています。



インド亜大陸の自然と地理



国土地理院「地理院地図」<https://maps.gsi.go.jp/> より作成



変化に富んだ自然環境

- ヒマラヤ山脈
- タール砂漠
- ガンジス川
- デカン高原
- インド洋

地球科学における「プレート理論」では、現在のインド亜大陸の原形は、約一億年前、ゴンドワナ大陸から分離したインド・プレートが、徐々に北上しユーラシア・プレートと衝突することで形成されたと言われています。

プレート衝突による隆起により、最北部には世界最高峰のエベレスト山を含む、世界の屋根と呼ばれるチベット高原とヒマラヤ山脈が形成されました。その南側の低地にはインダス川、ガンジス川、ブラフマプトラ川とその支流によって形成される沖積平野であるヒンドゥスタン平原が広がっています。なかでも肥沃なガンジス川流域はインドの中で最も人口が稠密した地域の一つとなっています。またインダス川東岸にはタール砂漠と呼ばれる乾燥地帯が広がり、オアシス都市が点在しています。

北インド平原の南側一帯は、最古の大陸の名残であるデカン高原が広がっています。高原の北はヴィンディヤ丘陵とサトプラ丘陵が、またその間にはナルマダー川が西に向かって流れています。これらは概ね北インドと南インドを分けるものとなっています。デカン高原の東西にあるガート山脈の麓には標高の低い海岸地帯が広がります。海岸都市はアラビア海、ベンガル湾、そしてインド洋交易を通じて発展しました。

変化に富んだ自然環境は、農産物、ひいては食文化の面にも反映されています。北インドは小麦食文化であり、ローティーと呼ばれるパンが主食となります。牛乳、ヨーグルト、フレッシュチーズ、精製バターなど乳製品を多く用います。ヒンドゥー教徒の多くはベジタリアンであるため、タンパク源として豆が重要な役割を果たします。一方、中世期以降、イスラム文化と交わる中でインド料理の中にも食肉を用いた料理が定着しています。日本でよく知られているタンドゥーリー・チキンもその 1 つです。ナーンは一般的にタンドゥール窯を用いてつくります。

南インドは米食文化が盛んです。ドーサーと呼ばれる薄焼きのクレープ状の物は米粉と豆粉を発行させた生地を用います。用いるスパイスも北インドとやや異なり、クミンに代わってマスタードシードをよく用います。東インド、特にベンガル州では水産物を用いた料理が有名です。東北インドでは植民地以降、茶園が開かれました。また山岳丘陵地帯では発酵食品など独自の食文化が営まれています。西インドのグジャラート州ではジャイナ教の影響から菜食主義の傾向が強いです。またデカン高原では雑穀を用いた料理が存在しています。



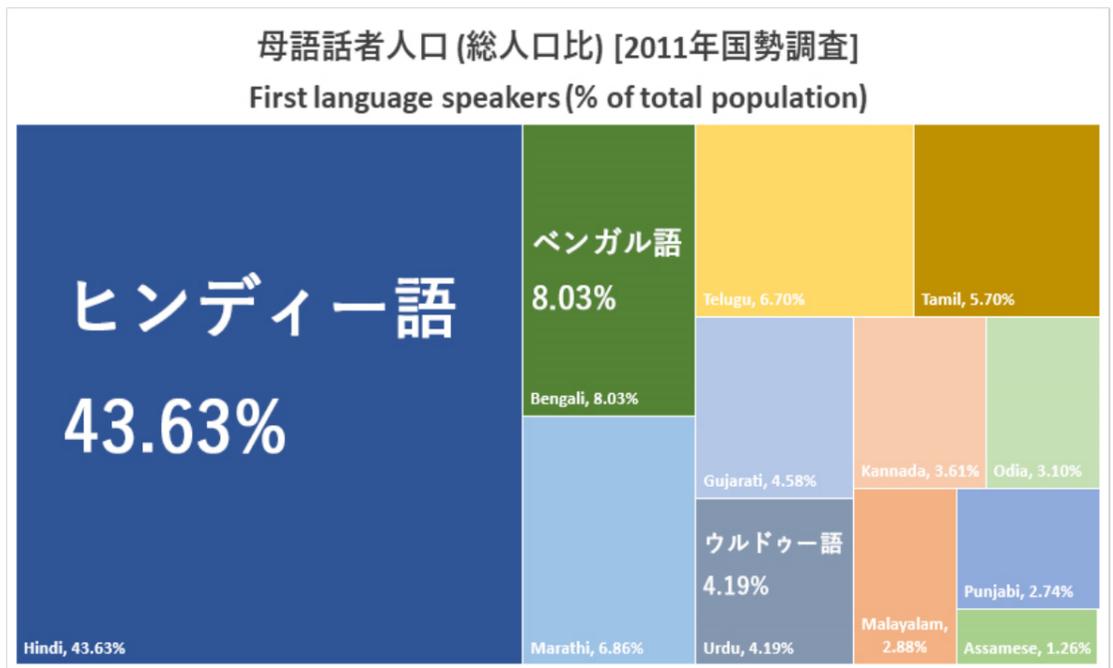
多言語・多文化社会



インドの多様性を最も良く表すものの 1 つは言語です。インドは多言語・多文字社会で有、単一の「国語」は存在しません。地域・社会階層・使用場面に応じて様々な言語が用いられます。「ヒンディー語」は北インドを中心に広く用いられている言語です。『インド国勢調査』(2011)によれば、言語別の母語話者は次のようになっており、ヒンディー語は、インド最大の母語話者数を持つ言語になります。

「国語」、「公用語」などの語は、南アジアにおいて非常に重要な意味を持っています。連邦制度を取るインドは、インド憲法 (1950 年施行) の第 17 編 343 条において、ヒンディー語を「連邦公用語 the Official language of the Union」と定めています。英語は憲法施行後 15 年、すなわち 1965 年まで利用される予定でしたが、非ヒンディー語圏、特に南インドからの要求を受け、公用語法が制定され、引き続き公の目的のために利用されています。

南アジアはイギリスの植民地であったという歴史的背景により、英語が社会的な威信を持っています。インドにおいては個人レベルで複数言語を併用する人々が数多くいます。特に社会的上昇のためには英語は重要になっています。このような社会的二言語併用を「ダイグロシア」とよびます。しかしながら、国勢調査において英語を「母語」として申告する人口は 25 万人(0.02%)にしかすぎないことに注意が必要です。第一補助言語(第二言語)、第二補助言語(第三言語)を加えると、その数は膨大なものになりますが、割合としてみるならば、英語を使用すると申告する人は全体の 10.6%にすぎません。英語のみで全ての人々と日常的なコミュニケーションができる訳ではないことには注意が必要です。インド社会における英語の重要性を踏まえつつも、ヒンディー語をはじめとするインドの諸言語に対する理解が不可欠になってきます。



2011年国勢調査	母語話者数	母語話者割合	第一補助言語	第二補助言語	合計
Hindi	528,347,193	43.63%	13.9%	2.4%	57.1%
English	259,678	0.02%	8.3%	4.6%	10.6%